
銀魂 - 春雨第七師団戦記 -

幻獣王

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

銀魂 - 春雨第七師団戦記 -

【Nコード】

N3418Y

【作者名】

幻獣王

【あらすじ】

砂漠の星で放浪中、戦いに飢えた夜兎族の青年は2人の宇宙海賊に遭遇する。この時、夜兎族の青年は人生の歯車を加速させる。

神威と阿伏兔（春雨側）が中心ですので、万事屋（地球側）メンバーが登場する分かりませんのでご注意ください。

似た者同士は突然出会う（前書き）

初の銀魂小説ですので、何卒よろしくお願いしますm——（m

似た者同士は突然出会う

何処かの惑星。

自然林が無い砂漠のと真ん中で佇む者が1人。南の空に高く昇る太陽と、太陽の日射が砂漠を灼熱化させる。

何故か周囲には、死体の山が転がっている。死体は人間では無い。

あまんと天人……そう地球と言う星では呼ばれている。

死体から流れる血が濁流のように、荒野を赤色へ半々に染めるが、血は砂に紛れて灼熱の太陽によって蒸発。

死体がゴロゴロ転がる中心に1人の青年が佇んでいた。

両目と髪の毛以外見えないように顔や両腕にも素肌を見せずに包帯を巻いている。服装は黒を基調とした中華服で身体全体を太陽の日射から守るように、柿色で塗られた傘を差し、意匠は江戸時代に使われた傘を類似させる。

「強いねえ」

感心が籠った声。

死体の山を無表情と平然とした態度で歩いて来る。

「これゼンブ君がやったの？」

声の主も青年と似たような姿だ。

「……」

質問に青年は答えない。

目だけはその声の主に合わせてる。

沈黙する青年に構わず彼は喋る。

「俺と少しだけ、殺ろうよ」

笑顔で「殺ろう」と青年に勝負を申込む。その無表情の裏にトンでもない何かを感じ取る青年は彼と向き合った瞬間、両者は同時に傘を放り投げていきなり殴打。

青年は素早く片方の空いた手で彼の殴打した手首を掴み、数10メートル先へ軽々と空へ投げる。

投げられた彼は空中で宙返り、砂地へ着地すると青年に向かって加速しながら走る。

青年も彼の行動に合わせて走る。

砂地を蹴って空中へ上がり、両者は身体全体を遠心力の応用で回し蹴り。脚と脚がぶつかり、青年は両脚で彼の脚を挟み、ネジを回すように彼を砂地へ叩き落とす。

後方へ数メートル跳んで下がり、彼が立ち上がるがどうか砂煙の先を見る。

あれくらいの衝撃で終わる筈は無いと踏まえ、暫く様子を伺う。

砂煙が舞い、その中から1つの影が現れる。

「ナカナカやるゝ。でもこれからだよ？」

砂漠がクッション代わりと成って叩き落とす衝撃が半減し、彼はまだまだ戦う気だ。

両目以外包帯で巻かれているからどんな表情をしているか青年の視点からでは確認出来ないが……分かる。

包帯の下では強い者と戦うことに喜び、嬉しそうに唇を曲がらせて笑っていることに。

それは青年も同じ事。

青年の強さに彼は喜びの声を上げる。

「最高だね！」

瞬時に両者は動き、拳を振るう。

関節部分が行き違い、2人の拳が頬に当たるが、大した痛みでは無い。だが構わずに殴打と蹴りの攻撃を続ける。

青年は上段回し蹴りで彼の首筋を、彼は片手で受け止めて一方向へずらして青年の胸元へ正拳。数ミリ後退りしながら倒れ込むが、彼の顎を狙い足で宙返り蹴り。

しかし、正拳で痛みが伴って着地に失敗する青年。顎を蹴られた衝撃で受身を取るのを忘れて砂地へ倒れ込む彼。

勝負は付いたように見えたが、まだ両者は殺る気だ。これほどまでに巡り会えた強者は居ない。2人の心が『まだ戦え』と叫びを上げている。

いや心では無い。血だ……2人に流れる一族の血が絶命するまで戦えと叫んでいる。

両者は立ち上がり、再び戦いの場へ戻ろうとした時、空に向けて1つ銃声が2人の耳に届いた。

銃声の正体に気づいた彼は舌打ち。折角の殺り合いが強引に止められてしまった。青年も敵の襲撃かと思い警戒するが……。

「止める神威」

戦闘を止めた者が現れたが、その者も傘を差している。傘を差している手には器用に青年の閉じた傘を持ち、片手には空に向けて閉じた彼の傘を持っていた。

投げて傘を渡し、『神威』と呼ばれた者は取っ手を掴み、再度傘を差す。もう1本の傘を詫び言で手渡した。

「済まないねえ、すつとこどっこい（神威）が喧嘩を売っちゃて……」

「ヒドいな〜阿伏兔。ケンカじゃなくて純粹に楽しんでいただけだよ」

「どつちも同じだろ」

漫才のように会話する神威と阿伏兔に蔑みの視線を送る青年。

端切れの良いところで神威と会話を終わらせ、ボサボサの肩まで伸びた長髪、ちよつと髭を生やし、歴戦の戦士を感じさせる男性の阿伏兔が青年に問う。

「天人だらけの死体をお前が殺ったのか？」

否定せずに青年は肯定の言葉で言う。

「嗚呼……俺だ」

「はぁ……先を越されたな」

溜め息を吐く阿伏兔。何かマズイことでもしたかと考える青年だが、心当たりが無い。

「何かしたか俺……」

気まずそうに言う青年に、阿伏兔は気さくに否定する。

「お前が殺った此処の天人は、俺達に反旗を翻そう企てた奴等だ。で、俺達は此処へ来てそいつらを片付けしようとしたんだが……」

「ギャクに仕事トラれちゃったてワケ。でも君のオカゲで少しはハ

ブけたね阿伏兔」

「少し？ 馬鹿かお前は……さっきの戦闘中に他の仲間が連絡で『全滅した』と言っている」

「へえ。つまりラクしたってこと？」

「……そうじゃなくて仕事を横取りされたんだよ！ だが、お前さんのお陰で少しは楽に帰れそうだ」

褒めているのか、怒っているのか分からない阿伏兔に傾げる青年。
阿伏兔の話は放って置いて、神威は青年との話に集中。

「ところで君、もしかして夜兔？」

「良く分かったな」

（いやいや、外見や傘を見れば分かるだろ）

神威の言葉に冷静に肯定する青年。心の中でツッコミを入れて、敢えて口に出さない阿伏兔。

「君は強い……」

青年の強さを評価にすると高ランク。互角に渡り合える相手を見つけ、喜びを隠せない神威は或る提案をする。

「俺達と一緒に来ない？ そうすれば君の力をゾンブんに活用出来ると思うよ？」

神威の實力は青年と同等。

阿伏兔に至っては述べる必要は無い。冷静に装い、物事を詳細に分析出来る知略と神威に引けを取らない字實力を持ち合わせているのを青年は見抜く。

この2人と一緒に居れば何か楽しい戦いが待っているかもしれない。顔の下半分に巻いた包帯の中で、薄笑いを浮かべて神威の誘いに乗る。

「一緒に来てやる」

「よかった、君ならゼツタイ言っとオモったよ」

笑顔で青年の問いに満足する。

予想通りだ、神威は瞼を丸くし、青年を快く歓迎。神威と似た奴が増えたことで、阿伏兔は肩が少し重苦しくなった気がした。

「名前はなんて言うの？」

「戦^{いくさ}」

「夜兎族にピッタリの名前だね。戦いの中でしか俺達（夜兎族）は生きるキボウをミイだせない」

戦と神威が拳と拳をぶつけての握手代わりで自己紹介を終えた。挨拶が終わるのを待っていたかのように1隻の空飛ぶ戦艦が、彼らの真上に大きな影を残してやって来た。

「あ、言いワスれてたけど……」

戦艦を指差して、笑顔で答える神威。

「こう見えて『春雨』の団長なんだよね俺」

「春雨？ 宇宙海賊で有名なあの春雨？」

神威の代わりに阿伏兔が言う。

「春雨の第七師団、『春雨の雷槍』と呼ばれている神威とは、こいつの事だ」

「噂で聴いたが、まさか実物を拝めるとは……」

星から星へ渡り歩き、戦いが起こる場所へと放浪していた夜兎族の青年…戦。彼は『春雨の雷槍』と言われる神威と出会うのであった。ずっとこどっこいがもう1人増えちゃったな、と阿伏兔は戦艦の降下音に紛れて溜め息を吐いた。

春雨第七師団が所有する戦艦を神威と阿伏兔が戦に紹介している。天人の戦艦は放浪中に色々と乗せて貰ったから、内部構造はほとんど知っている。

では何故、知っている事を今更ながら紹介して教えて貰っているのか、それは神威が口笛を吹きながら嬉しそうにしているからだ。因みに顔に巻いている包帯は外している状態。

自分と似た性癖を持つ夜兎族に会えたことで、凄く上機嫌なのだ。

内部構造は知ってるよ、等と口が裂けても言えない。言ったら笑顔で阿伏兔を巻き込んで半殺しか、戦艦沈没で宇宙に放り出されて窒息死、などに成り兼ねない。こんな嬉しそうな神威は、阿伏兔も見ることが無い。それも上機嫌で口笛を吹く神威を見られるなんて貴重な光景だ。

阿伏兔は神威の話を聞くと驚きの半々、戦に至っては神威に合わせて話を進めている。

戦と阿伏兔の2人は肌で感知していた。戦場以外での場所で無駄に寿命を減らしたくは無い。

「うーん、もう良いかな？」

一通り紹介を終え、両手を上げて背中を伸ばす。神威の戦艦紹介がやっと終わったと、戦と阿伏兔は心の中で安堵する。

「じゃあ阿伏兔、俺はもうネるから戦に空きベヤでもショウカイしてよ」

片手で口を扇いで欠伸びながら神威は戦艦内の何処かへ歩いて去った。

残業を押し付けられ、溜め息が出る阿伏兔。此所最近、溜め息ばかり出るのが癖に成りつつ在る。自覚はしているつもりだが、神威の行動には手を焼いているから、自然と出てしまう。

「神威は普段あんな感じか？」

戦った時の冷徹な神威と、今の嬉しそうな神威のギャップに驚いていた。

「団長は嬉しいんだよ。自分と同じような相手に会えて絶好調さ」

閉じた傘の柄を片手で、肩に担いで「付いて来い」と言つて手招き。戦は似た者同士と会えて喜んでるんだと理解し、阿伏兔に付いて行く。

「此処空き部屋だから、好きに使つて良いぞ」

傘の先端部で指した方向に自動開閉式の扉。どうやらあの扉の向こうが、戦の寢床らしい。

「そんじゃあ、まだ仕事あるから俺は此所で」

手振りして去る阿伏兔を戦が呼んで引き止める。

「1つ訊いて良いか？」

阿伏兔が面倒くさそうな表情で振り返る。

「何だ？」

「神威は…血に命じて戦うのか、血に抗つて闘うのか？」

「どうしてそんな事を？」

「これから共に戦う戦友、一応聞いておこうと思つて」

深く問い質すことはなく、阿伏兔は率直に答える。

「前者さ。因みにおじさんの場合は愛でる方だ」

「なるほど」

「逆に訊くが、お前さんは？」

「俺も」

今度は阿伏兔が訊いてきた。問いには戸惑うことなく戦は、

「俺も神威と同じだ。血に命ずるがままに戦場を駆け巡る。これが俺の生きる道」

「団長が聞いたなら喜ぶだろうね」

其所で戦は休みの言葉を交わして、阿伏兔は何時もの気の抜けたような態度で今度こそ去ったゆく。

（……面白くなりそうだ）

夜兔族の青年『戦』。

戦いに飢えた戦は、神威や阿伏兔と共に齒車は加速し、始まる。

似た者同士は突然出会う（後書き）

神威と阿伏兔がキャラ崩壊しないか心配ですが、執筆頑張ります！

オリキャラ設定（前書き）

題名通り、オリキャラ設定です。

オリキャラ設定

名前：戦いくさ

性別：男

種族：夜兔族

年齢：19歳

身長：170cm

体重：50kg

誕生日：不明

髪の毛：緋色

瞳：オレンジ色

好きなもの：戦闘 睡眠 強者と戦う 米 味噌汁

嫌いなもの：煙草 お菓子全般 子どもの泣き顔

戦闘方法：傘 格闘

天人の宇宙船をタクシー代わりに色々と放浪しては、戦いが起こる処に乱入して自らの渴きと飢えを満たしている夜兔族の青年。

とある砂漠の星にて、春雨第七師団団長『神威』と部下である『阿伏兔』に出会い、春雨第七師団に入団。

それ以降は神威のお気に入りリストに追加されて、時々タイムン勝負を挑まされる。でも本人は鬱陶しくない様子。

性格は大人しいが、戦闘になると派手に暴れ、口調も多少変わる。

神威とは似た者同士で実力も互角。しかし、女と子どもだけは絶対殺さない主義。決して変な意味ではない。

阿伏兔とは世間話する程度の仲。

取り引きする場合は相手側が何かを企む（前書き）

この話はオリジナルですので、ご了承ください。

取り引きする場合は相手側が何かを企む

「仕事だぞ」すつとこどっこい」

朝市に声を掛けて来たのは阿伏兔の声。円形の窓から風景を眺めていた戦。実際は乗船してから1日が過ぎて宇宙を漂っている。

阿伏兔の第一声が聞こえてないのか、呆然とした様子だった。今回の仕事内容を伝える為に、精神が忘却の彼方へ逃亡する戦の頭部を強めにチョップ。

「おはよお」

チョップされたことで阿伏兔が居る事に気づき、軽く挨拶。寝起きが激しいのか、目元が眠そうだった。

数秒間閉じたり、数秒後に開くがまた閉じたりして眠気と闘っているようだ。そんな様子を見もせず阿伏兔は仕事内容を記した用紙を見ながら明確に伝える。

「上からの命令でお前と二人一組を組むことに成った。地球で、とある武器製造集団の天人と取り引きして武器調達だ。戦はボディガード、俺は交渉とのこと。ビジネスだからねえ、戦闘は避けて安全に成立したいもの……」

ビジネスの為に赴くものだから気楽にやっていきたいし、無闇な戦闘は最もごめん。相手が夜兔族の場合、話は全くの別だ。

ビジネス目的で向かうものだから戦闘でチャラにしては困る、阿伏兔はそう言いたかったのだが、話の最中に立ちながら居眠りする戦に言葉を喪失した。

「……授業中に居眠りする悪ガキか？」

頭部に、春日部市に在宅する某主婦の有名な拳骨を喰らわせ、深い睡眠に入る戦の意識を覚醒。

目から光線が出るくらいの早さで起きた時には、大きなたんこぶが1つ出来騰がる。指で触り、膨張度合いを確かめた。

「居眠りはいけないな、すつとこどっこい」

「居眠りじゃないよ、仮眠だよ」

「完全に顔が下向きついでに熟睡だったぞ」

「最近まともに寝てないんだ」

一番予想が付く原因は寝不足か疲労の蓄積。また戦は堂々と阿伏兔の目前で大きな欠伸をする。

しかし、お呑気に欠伸をしている暇は無い。今からビジネスで赴くのに、無邪気に楽しむ小学生の遠足気分で居て貰っては困る。

「で、俺達は今日何の仕事に赴くんだっけ？」

阿伏兔はこれから向かう星へ、どう言った事柄で行くのか、戦が話を聞いていたかを確認する為に尋ねる。

後頭部を掻きながら、脳内に閉まった記憶の部分を引き出して曖昧に答える戦。

「阿伏兔の黒歴史をレポート用紙にまとめる…だっけ？」

「まとめなくていい、寧ろおじさんの善良な部分をまとめるすつと

「どっこい」

「違うの？」

「違う。逆にお前さんの黒歴史を聞いてみたいね」

その時、戦の眉毛がぴくりと動いた。

「……聞きたいなら聞いてみる？ 結構悲惨だよ？」

自慢気に微笑んで言い、本当に聞きたいかを試す半分、少しからかってみたが……。

「いや…やめとく」

蠅を追い払うかのように手で振って、戦の黒歴史を聞くのを却下する。

「いきなりネタバレ染みた話は、おじさん気が乗らないね」

「意外と空気読めるんだ」

「空気読みの達人なのさ」

「それは1プレイ100円？」

「人面ゲーム機にするなすつとどっこい」

阿伏兔が喋り終わってから1分前後の沈黙が開き、話を再開するために最初の話を出す戦。

最初の話題と言えば『今回の仕事』である。もう一度説明を頼んで、阿伏兔は仕方なしに了承。新人の不注意と言うことで受け流し、再度仕事内容を明確に伝えた。

只今の状況、春雨第七師団の宇宙船は、地球のとある沸き上がる広大な湖に着陸する。宇宙船の甲板上から湖の周辺へ繋がる階段が敷かれ、戦と阿伏兔が仲良く降りて来る。旅行に必要な大きな鞆を、阿伏兔が片手で持っている。鞆の中身は取り引きに必要な物だろう。

緑が多い密林が2人を歓迎する。強い陽射しから身を守るために傘を差している。日当たりが多いし、日陰の部分は密林の中だけ。戦は万が一の時に備えて、顔中と両手腕を包帯を巻いている。襲撃されたら、傘を捨て、素手での戦闘で望まなければならない。周囲は樹木だらけ、いくら夜兔族専用の傘と言えど、傘以上の強度を持つ樹木の大群には足手まとい。

障害物が多く鎮座する戦場では、小回りが効き、小振りて済む戦術しかない。お得意の格闘技で攻める方針で、戦術を戦は1人で組み込んでいく。阿伏兔に相談しようか迷ったが、春雨所属歴は長年だと思っし、何時もたれ目でやる気の無さそうに見えるが、やる時はビシッと決める型と勝手に解釈。事実、阿伏兔が戦っている姿は見たこと無いが、戦の勝手な解釈は大体当たっている。

「こんなジャングルみたいな処にあるの？ その武器を売買する村は……」

密林が重なる地帯に本当にあるのか、怪しく疑い始めた戦。

「良く言うたろ。なんとかを隠すのは森の中って。江戸で武器売買に俺達春雨が関わってるのを知ったら、両方が損をする」

「でも、地球でやることはないと思うんだが」

「地球で密売やら何やらは裏方で動く奴には都合が良いんだよって、着いたぞ戦」

阿伏兔が目的の場所へ着いた事を言い、戦は落胆する。目的の場所とは、何処にでもひっそり隠れて住むような『村』だった。扉が無い門には、両脇に2人の犬型天人が門番として見張っている。槍の刃が2人の前を塞ぐ。門番の1人が警戒しながら言う。

「貴様ら何者だ？」

お決まりパターンの台詞がキターっと2人は思いつつ、阿伏兔は怪しい者では無いと丁寧に答える。

「俺は春雨第七師団の阿伏兔だ。で、こいつは戦」

槍を前に突き出したまま、春雨の名を聞いた途端に門番の表情が強張る。

「春雨？ あの宇宙海賊の春雨が此処になんの用だ！」

襲撃に来たと勘違いした門番の2人。阿伏兔は下手な争いを避けるために、差している傘を戦に預けて貰い、代わりに戦が傘を差してもらい、阿伏兔が鞆の蓋を開けて門番に良く見えるように中身を見

せる。

「何だこれは？」

中身の物に目を丸くした門番。今日此処に来た目的を告げる阿伏兔。

「取り引きに来たんだよ。お前さんとこの武器を春雨に売買する予定の筈だ」

「……取り引き？　そう言えば今日、武器の取り引きに来客が来るとリーダーが言っていたが…お前達か？」

「そういうこと。その来客が俺達さ」

「これは申し訳ありません。春雨でもてつきり“鮮血の狼”かと…」

「……！？」

構えるのを止め、柄を地面に置く。警戒を解いてくれたようだが、門番が口に出した『鮮血の狼』の言葉に瞳孔が一瞬開く戦。鞆の蓋を閉じた阿伏兔は、その事を訊く。

「鮮血の狼？　なんだいそれは？」

「知りませんか？　地球人や我々天人を見境無く殺していく危険な天人です。戦いが或る処、奴は現れる」

「天人が地球人や天人を問答無用で殺すか…厄介だな」

「ええ…だからこうして警備を厳重にしているんです」

預けて貰った傘を返し、門を通り越して、この村を…武器製造を仕切る筆頭の天人が居る建物へと向かった。

「春雨第七師団の者か？」

煙草を口に加えて、阿伏兔と戦を出迎えたのは…犬型の天人。どうやら此処を仕切っているリーダーは、この天人だ。壁に貼られた紙に『リーダーの部屋』と書いてあったのだ。実に分かりやすい。

建物に入る前も、数人の犬型天人を見かけたが、此処は犬専用の動物園かと思うほど多い。犬型天人が101匹びったり居たらそれはそれで面白いかもしれない。

吐き出された煙草の煙は、呼出煙と成って阿伏兔と戦の嗅覚が察知。特に戦は煙草の匂いが嫌いだ。精神的に狂わされている感覚が身に染みる。一刻も早く此処から出たいと言う気持ちで一杯だ。

机上に置かれた灰皿には5、6本の吸った後の煙草。ヘビースモーカーだと分かる。

「そつだ。お宅らで生産している武器を買わさせて貰いたい。金もこの通り……」

鞆の中身は大金。武器を買うには丁度いい金額だ。

「で…購入理由は？」

「近々、“ある組織”と手を組む予定なんだ。その為の武器売買さ」

「なるほど……」

灰皿の表面に煙草の火元部分を押し付け、快く了承。

「契約成立だな」

団長が居たら真っ先に喧嘩売っただろう、阿伏兔はそんなことを考えながら大金が詰まった鞆の蓋を閉めた。
神威と比べ、大人しく待つ戦の方が感銘を受ける。

「……武器売買は日が暮れてからにして貰えないか？」

急な申し出を引き上げるリーダー。おそらく武器の用意を済ませてから、売買を実行すると捉えた阿伏兔は申し出を受け入れる。

「全然構わない。武器を調達出来れば良いって話さ」

「それでは日が暮れるまで定食屋なり卓球なりと好きにしていってください」

（定食屋ってあるんだ）

武器製造や武器売買する処に定食屋が有るのに驚く阿伏兔。

何だか急に丸腰に成って感じが善良なものには、何か裏が在ると見た戦。だが、それを証明する材料が無い。

夜に成るのを待ちつつ、定食屋へ足を運んだ。戦と阿伏兔が居なくなっただけを確認すると、数人の仲間を呼ぶ。

「あの2人：“新兵器”を嗅ぎ付けて此処に来たのかもしれん」

「先日極秘購入したあの設計図から製造した“新兵器”をですか？」

「だとしたら早急に手を打たねばならん。全員に伝えよ、春雨から来た2人を始末せよと」

「了解です！」

実行は日が暮れた夜。戦と阿伏兔の始末命令が出された。

取り引きする場合は相手側が何かを企む（後書き）

もう一度話を読み返してみると、ギャグセンスの無さに落胆。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3418y/>

銀魂 - 春雨第七師団戦記 -

2011年11月17日21時43分発行